様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月１５日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22601006
研究課題名（和文）　博物館空間におけるユーザー視点からの展示評価の実践的研究

研究課題名（英文）　Study on the Evaluation of Museum Exhibition from Users' Points of Views

研究代表者
平井 康之（HIRAI YASUYUKI）
九州大学・芸術工学研究院・准教授
研究者番号：10336084

研究成果の概要（和文）：200 字
博物館を取り巻く社会的状況は、来館者ニーズにも変化をもたらしている。本研究では、博物館の来館者ユーザーの視点から、展示デザインの現状の課題を抽出、今後の展示デザインに必要な要件を明らかにし、多様な来館者ユーザーに対応する展示デザイン評価の指針を導きだすことを目的とした。その結果、社会レベル、展示レベルでの博物館の課題を抽出し、来館者ユーザーの気づきをもとに評価指標作成、データベース開発を行った。

研究成果の概要（英文）：
Social requirements around the museum are affecting the visitors' needs. The purpose of this study is to extrude current issues on exhibition design, clarify conditions and set criteria for the next exhibition design responsive to diversified visitors' needs. As a result, issues on both social and exhibition levels were found, and, evaluation criteria and database were developed based on visitor insights.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：博物館学
科研費の分科・細目：　9028
キーワード：人間生活環境、ユーザーインターフェース、インクルーシブデザイン、ユニバーサル、ユーザー参加、展示、鑑賞、博物館

１．研究開始当初の背景

博物館への入館者総数は、平成 4 年以降ほぼ横ばいで推移しているが、博物館数は増加傾向にあるため、1 館当たりの入場者数は減少傾向にある。（文部科学省、2008）背景にある少子高齢化による若年人口の減

少、社会教育費の削減、経済状況の悪化など博物館を取り巻く社会的状況は、来館者ニーズにも変化をもたらしている。しかしながら来館者のニーズに関する実証的調査が不足しているのが現状である。

２．研究の目的

本研究では、博物館の来館者ユーザーの視点から、展示デザインの現状の課題を抽出、今後の展示デザインに必要な要件を明らかにし、多様な来館者ユーザーに対応する展示デザイン評価の指針を導きだすことを目的とする。

３．研究の方法

本研究では、ユーザーとともに現場での観察から気づきを抽出・共有し課題マップを作成。今後の展示デザイン評価のガイドライン（指標）を策定、持続的活用を目指しホームページで公開した：

平成２２年度
（１）博物館評価手法の先行事例調査
（２）ワークショップによるユーザー調査
平成２３年度
（３）課題マップ作成
（４）評価指標にもとづくデータ比較・解析
平成２４年度
（５）試作による検証
（６）博物館評価指標の完成
（７）ホームページでの公開

を行った。研究体制は以下の通りである。

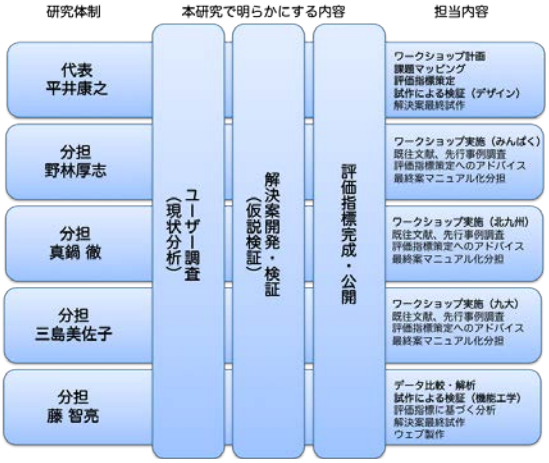

図１　研究体制

ユーザーと「ともに」現場での観察から気づきを抽出するために、ユーザー参加型であるインクルーシブデザインのプロセスを用いた。博物館での観察で得られた気づきをデータとして収集し、ユーザー視点の課題を抽出した。

４．研究成果

４−１．研究の主な成果

（１）ウェブ上で使用可能なユーザーデータベース開発

国立民族学博物館にて視覚障がいを持つ方々をリードユーザーとしてユーザー参加型ワークショップ形式による調査を行い、観察から気づきを抽出して課題マップをまとめたが、エクセルデータ形式では活用が難しいことから開発につながった。

（２）展示デザイン評価指標作成

来館から鑑賞までの来館者ユーザーの気づきを分類する展示デザイン評価項目と、データベースのタグ付けを連動することで、データの管理・活用を容易にした。

（３）国立民族学博物館全館案内マップ、チラシデザインおよびデジタル触地図の考案、試作

データベースを活用した解決策の一部として、国立民族学博物館の改修計画において全館案内マップ、チラシデザインおよびデジタル触地図の考案、試作を行った。

（４）国際シンポジウムの開催

２０１１年３月には、今年度の成果を活かし、国立民族学博物館の機関研究である「包摂と自律の人間学」プロジェクトである「ケアと育みの人類学」との共同企画である「インクルーシブデザインとは何かーケアと育みの環境を目指して」、「包摂した社会空間の実現に向けてー課題とインクルーシブデザインの解決モデル」と題した国際シンポジウムを国立民族学博物館において開催した。招聘した３名の英国の実践者との研究交流により、社会レベルでは社会の人を育む場としての博物館、展示レベルでは身体的技法など多様な感覚を用いて体験を育む展示のあり方、という社会的包摂と博物館の関係について、新たな課題の抽出と整理を行うことができた。

（５）学術論集のまとめ
国立民族学博物館で２０１２年３月に開催した国際シンポジウム「インクルーシブ・デザインとはなにか―ケアと育みの環境を目指して―」および「包摂した社会空間の実現にむけて―課題とインクルーシブ・デザインの解決モデル」の成果をもとに学術論集を作成した。

（６）ウェブサイト公開
研究結果の一般公開のために、持続的活用を目指したウェブサイトを作成し、ユーザーデータベースと上述の学術論集のサマリーを公開した。

４−２.得られた成果の国内外における位置づけとインパクト
ユーザー参加型のインクルーシブデザイン手法によるワークショップ、およびその気づきデータをもとに結果の共有を図るプロセスは、今回研究に参加した博物館以外に、や奈良県障害者芸術祭や、福岡市博物館でも用いられ展示室のリニューアルに活用された。また国立民族学博物館でも、館へのアクセスデザインの改善に応用されている。

４−３.今後の展望
学術論集の正式な出版を計画中である。ホームページでは、学術論集など結果の公開だけではなく、持続的に日本のユニバーサルミュージアム研究の知の集積を行っていきたいと考えている。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計９件）
（１）野林厚志、『東アジアの民族　イメージ：前近代における認識と相互作用』、国立民族博物館調査報告 104,国立民族学博物館、査読無、１０４，２０１２年、１７１ページ

（２）Yamamoto, SI., Nishimura, N., Torimaru, T., Manabe, T., Itaya, A. & Becek, K.、A comparison of different survey methods for assessing gap parameters in old-growth forests、Forest Ecology and Management、査読有、２６２、２０１１年、８８６−８９３ページ

（３）三島美佐子・坂倉真衣・田中あかり・松隈明彦・岩永省三、実践報告：九大博物館のホンモノ標本でチャレンジ！―見よう・描こう・比べよう！―、九州大学総合研究博物館研究報告、査読無、９、２０１１年、６９−７５ページ

（４）野林　厚志、「展示会「百年來的凝視」を共催して - 順益台湾原住民博物館 開館 15 周年記念特別展」、『台湾原住民研究』、査読無、１４、２０１０年、１７３−１７９ページ

〔学会発表〕（計２２件）
（１）平井康之、野林厚志、真鍋徹、三島美佐子、藤智亮、博物館空間におけるユーザー視点からの展示評価の実践的研究、大学博物館等協議会２０１２年度大会・第7回博物科学会、２０１２年6月２１日～２０１２年６月２２日、京都大学総合博物館

（２）藤　智亮、野林厚志、平井康之、真鍋徹、三島美佐子、課題マッピング：来館者の気づきデータベース、国際シンポジウム「包摂した社会空間の実現にむけて−課題とインクルーシブデザインの解決モデル」、２０１２年３月４日、国立民族学博物館（大阪）

（３）野林　厚志、藤　智亮、平井康之、真鍋徹、三島美佐子、坂倉真衣、「さわって物を理解する：物質文化を伝えるハンズオン展示」、国際シンポジウム「包摂した社会空間の実現にむけて−課題とインクルーシブデザインの解決モデル」、２０１２年３月４日、国立民族学博物館（大阪）

（４）平井康之、インクルーシブデザインにおけるケアと育みの可能性、国際シンポジウム「インクルーシブデザインとは何か−ケアと育みの環境を目指して−」、２０１２年３月３日、国立民族学博物館（大阪）

（５）野林　厚志、「国際連携展示『百年來的凝視』を通じて考えたこと」、民族自然誌研究会、第65回例会「研究者による展示実践、その意義と可能性」、２０１２年1月２１日、京都大学楽友会館（京都）

（６）野林　厚志、「博物館資料の属性：異なるコンテキストにおかれるモノ」、情報処理学会、第１４６回ヒューマンコンピュータインタラクション研究発表会、２０１２年1月１９日、国立民族学博物館（大阪）

（７）三島美佐子、後小路雅弘、大鶴憲吾、平井康之、藤 智亮、野林厚志、真鍋 徹、「アートリソースとしての研究教育資産の魅力と活用：九大博物館第一分館倉庫の活用実践から」、大学博物館等協議会・博物科学会、

２０１１年６月２３日、名古屋大学（名古屋）

〔図書〕（計　８件）
（１）平井康之、花書院、『デザイン教育のススメ～体験・実践型コミュニケーションを学ぶ～』『ユーザー参加ワークショップの方法』、２０１２年、４５ー６４ページ

（２）平井康之、藤智亮、野林厚志、遊文舎、International Symposium ‘Inclusive Environment for Care and Education for Life’ 要旨集、２０１２年（西暦）、４、５、８、９、１７、１８、２１、２２ページ

（３）鈴木まほろ・亀田佳代子・佐久間大輔・真鍋徹、日生態誌、地域の博物館が担う自然史研究の意義，博物館と生態学（14）、２０１０年、３９９ー４０３ページ

〔その他〕
ホームページ等
（１）ホームページ
ユニバーサルミュージアム：「博物館空間におけるユーザー視点からの展示評価の実践的研究」
http://imech.id.design.kyushu-u.ac.jp/UM/

（２）報道関連情報
２０１２年３月２２日の毎日新聞で「美術館の課題解決障害者ら交え模索」と題し、国立民族学博物館で行われた国際シンポジウムが紹介された。

２０１２年３月２１日の朝日新聞で「愛される博物館への道」と題し、国立民族学博物館で行われた国際シンポジウムが紹介された。

（３）アウトリーチ活動情報
２０１２年３月３日、国際シンポジウム「インクルーシブデザインとは何か-ケアと育みの環境を目指して-」、国立民族学博物館（大阪）

２０１２年３月４日、国際シンポジウム「包摂した社会空間の実現にむけて-課題とインクルーシブデザインの解決モデル」、国立民族学博物館（大阪）

２０１２年２月、INCLUSIVE DESIGN NOW ２０１２in Tokyo オープン i.school２０１２ Day-6: インクルーシブデザインによるユーザーイノベーション：展示空間からの発想，東京大学 i.school、東京大学 本郷キャンパス工学部２号館２階

２０１１年１１月、INCLUSIVE DESIGN NOW ２０１１、ワークショップ「展覧会をインクルーシブするワークショップ、京都大学総合博物館、京都大学総合博物館

６．研究組織
(1)研究代表者
平井　康之（HIRAI YASUYUKI）
九州大学 大学院 芸術工学研究院 准教授
研究者番号：10336084

(2)研究分担者
野林 厚志（NOBAYASHI ATSUSHI）
国立民族学博物館
研究戦略センター 教授
研究者番号：10290925

真鍋 徹（MANABE TORU）
北九州市立自然史・歴史博物館
自然史課自然史担当係長（学芸員）
研究者番号：90359472

三島 美佐子（MISHIMA MISAKO）
九州大学総合研究博物館 准教授
研究者番号：30346770

藤 智亮（FUJI TOMOAKI）
九州大学 大学院 芸術工学研究院 助教
研究者番号：60274544